

家庭科教育における国際理解教育の展開
—生活文化の歴史的理解からのアプローチ—

木林祥子

「研究の目的と方法」

本研究の目的は、自国の生活文化の歴史的理解からはじめる国際理解教育の展開について示し、その独自性と教育価値を明らかにすることである。筆者は、拙稿「国際理解教育—家庭科からの問いかけ」¹において、家庭科のなかで国際理解教育を進めることの重要性、今後の可能性について論じ、その概要で、「私が国際理解教育を進めるにあたって育てたい人材は、世界と豊かなつながりをつくることのできる日本社会を形成する人である。地球市民の一員として、私たちには本当の意味で豊かな日本社会を築く責任がある。(略)一人ひとりが日本社会をつくっていくのだという意識、その責任を負っているのだという意識、自分たちの力で真に豊かな日本社会にしていくことが、地球規模の問題を解決するために必要なのだという意識を、国際理解教育を通して育てていかなければならない」と述べた。自国の未来社会のビジョンや、社会に対する責任感なくして、地球規模の問題の解決も、国際貢献もない、という主張である。

このような主張の背景には、筆者自身のこれまでの国際理解教育実践における反省がある。筆者は15年前に開発教育のセミナーに参加したことをきっかけに、開発教育に関心を持ち、家庭科の授業の中に開発教育を取り入れるようになった。生徒の関心も高く、大きな手ごたえも感じていたが、自分自身、開発教育で取り上げる課題に対して解決策を見出せずにいた。また、授業に対する生徒の感想からも、「このままではいけない」と感じながらも、どうすることもできない閉塞感が漂っていた。

その後、青年海外協力隊員として、セネガルで活動した。そこで、セネガルに誇りを持ち、自国の未来に責任を持つセネガルの若者に出会い、自分の教育実践に欠けていた視点に気がついた。そして前述の主張をするに至った。

さて、筆者の主張である、「一人ひとりが日本社会をつくっていくのだという意識、その責任を負っているのだという意識、自分たちの力で真に豊かな日本社会にしていくことが、地球規模の問題を解決するために必要なのだという意識」を、家庭科のなかで育むために、筆者は前述の拙稿において自国の生活文化の歴史的理解を国際理解教育につなげていく方法について提案した。本論文では、文献での調査を中心に、自国の生活文化の歴史的理解を国際理解につなげるという家庭科独自の国際理解教育の展開について明らかにする。そして、その方法の独自性と重要性について示すことで、国際理解教育においてのみならず、教育全体における家庭科教育の存在意義を明らかにする。

¹ 帝塚山学院大学国際理解研究所主催、第29回国際理解教育賞(2004年)、奨励賞受賞

「論文の構成」

序章 はじめに

第1節 研究の目的

第2節 研究の構成と概要

第1章 日本の国際理解教育の歩みと課題

第1節 日本の国際理解教育の歩み

(1) ユネスコと国際理解教育

(2) 日本における国際理解教育の歩み

第2節 国際理解教育における自文化理解

(1) 教育政策の中における自文化理解

(2) 異文化理解を可能にする自文化理解

第2章 家庭科教育の歴史

第1節 良妻賢母主義教育のための教科

第2節 民主的な家庭建設のための教科

第3節 性別役割分業を推進する教科

第4節 男女共同参画社会の実現をめざす教科

第5節 危機にある家庭科

第3章 高等学校家庭科教育における国際理解教育の現状

第1節 学習指導要領家庭科における国際理解にかかわる記述

第2節 高等学校「家庭総合」の教科書にみられる国際理解にかかわる記載の傾向

(1) 人の一生と家族・家庭

(2) 子どもの発達と保育・福祉

(3) 高齢者の生活と福祉

(4) 生活の科学と文化

(5) 消費生活と資源・環境

(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ

第3節 家庭科における国際理解教育の先行研究考察

第4節 家庭科における国際理解教育の授業実践についての考察

第4章 生活文化の歴史的理解からはじめる国際理解教育の展開

第1節 国際理解教育における生活文化理解に関する先行研究考察

第2節 生活文化の歴史的理解から国際理解へ

第3節 生活文化の歴史的理解から始める国際理解教育の授業構想

(1) 題材の設定の理由

(2) 学習計画

(3) 授業のまとめ

(4) 今後への展望

第5章 おわりに

第1節 結論

第2節 今後の課題

「論文の概要」

本論文では、家庭科のなかでの国際理解教育として、自国の生活文化の理解を国際理解につなげていく道筋について示し、そのような実践が国際理解教育の前提として必要であることについて明らかにした。また、それを明らかにすることによって、国際理解教育における家庭科の存在意義を明らかにし、教育全体における家庭科教育の存在価値を示した。さらに、具体的な授業構想を提示、考察することにより、主張を裏付けた。

第1章では、日本の国際理解教育の歩みについて整理し、課題を明らかにした。日本の教育政策は、異文化を理解するためには自文化理解の教育が重要であること、世界の国々と信頼関係を強固にし、自信を持って国際貢献できる国づくりには、愛国心が不可欠であることについて述べている。しかし、現代世界の民族紛争の激化という傾向からも、自文化を理解し、我が国と郷土を愛することと、異文化を理解、尊重し、国際社会の平和と発展に寄与することとは、容易に矛盾なく統合される教育目標ではない。そこで、異文化理解を可能にする自文化理解のあり方、世界の人々と共に生きることにつながる愛国心のあり方について明らかにすることは、国際理解教育を進めるにあたって重要な課題であることについて述べた。

第2章では、家庭科の歴史についてまとめ、課題を明らかにした。現在家庭科は、小学校から高等学校まで男女共に学ぶ必修教科である。しかしこのような形で授業が行われるようになるまで、家庭科は、国の政策に大きな影響を受け変遷してきた。国際化の進む現代社会において、また、生徒の生活経験が不足していると言われるなかで、家庭科の果たす役割とはいったい何か、家庭科の存在意義はどこにあるのか。これらについて明らかにすることは家庭科教育における重大な課題であることについて述べた。

第3章では、家庭科における国際理解教育の現状と課題について考察した。第1節では、現行(1999年改訂)の高等学校学習指導要領の記載をもとに現状についてまとめた。第2節では、現在(2009年)高等学校家庭科で使用されている「家庭総合」の教科書7社12冊を調査し、国際化や国際理解に関わる内容を広く抽出し、資料としてまとめ、現状について分析した。第3節では、家庭科における国際理解教育について先行研究を提示し、その傾向と課題について分析した。先行研究により、家庭科における国際理解教育の重要性について関係者の共通理解がされていないこと、また、家庭科のなかでの国際理解教育において、どのような力を育むために、どのような方法で進めていくのかについて、国際理解教育を実践している家庭科教師の中でも共通理解がされていないこと、さらに、教育全体における家庭科教育の重要性が明らかにされていないことについて明らかにした。第4節では家庭科教師の授業実践について考察し、ほぼすべての実践は、ねらいの1つに生活文化の継承を挙げていることを示した。そのような国際理解教育は、家庭科の独自性を示すもので、大きな教育価値を持つということについて述べた。

第4章では、国際理解教育において、家庭科が、独自性と大きな存在価値を持つことを明らかにするため、「刺し子」の授業構想を提示し、自国の生活文化の理解が異文化理解を可能にすること、そしてそのような実践が、あらゆる国際理解教育の前提として必要であることについて論じた。

第1節では、家庭科教育における、生活文化理解についての先行研究として、村田泰彦と福原美江の理論について述べた。村田・福原は、家庭科において、一人ひとりが生活文化の継承と創造を担うという生活観を育てることに重点を置いている。そのためには、まず、生活文化の根源を

さぐり、そこから、先人が生活をいつくしみ、育てるなかから辛苦の末に生み出した教育価値に着目して、生活の知恵に学ぶことが必要であること、さらに、このような生活文化を単に受容し、継承するだけでなく、これからの新しい生活文化を創造するためには、生活文化を時間と空間の系列からとらえる、生活史的理解と比較生活文化的理解が必要不可欠であることを述べている。第2節ではこの村田・福原の理論をもとに、生活文化の歴史的理解が国際理解教育につながる道筋について、米に関する授業実践を通して明らかにした。第3節では、その最も実現可能な具体的な方法として「刺し子」の授業構想を提示した。

生活文化の根源を含む歴史的理解を通して、生徒に、現代の生活は、それぞれの時代を生きた人々の選択の結果であり、現代の生活文化のなかには、懸命に生きてきた先人たちの工夫や知恵、祈りや願いが込められていることを理解させる。また、生徒に、それぞれの時代を生きた人々が、何を考え、何を求め、何を祈り、願ってきたのかを想像させる。では、先人たちは、日々何を願い、何を夢見ていたのか。それは、飢えや寒さやひもじさから開放され、安心して毎日米を食べることができる、そんな日々ではなかったか。誰もが認める貧困がそこにあり、これを克服し、豊になることは、誰も疑わない願いであった。それぞれの時代を生きた人々がどんな思いで豊かさを求めたのか、貧困を克服した先に何を夢見ていたのか。現代のように、毎日安心して米が食べられるようになったら、人々の関係はどんな風になると夢見ていたのか。そのような祈り、願いを、生活文化の歴史的理解を通して、生徒に想像させるのである。このような先人の思いを受け継ぎ、先人たちが貧困を克服した先に描いたであろう、豊かで余裕のある人と人との関係を、豊かな社会を、実現させようという意志と気概こそが愛国心であると筆者は定義づけた。

生徒が生活文化に対して、このような視点で、根源を含む歴史的な理解ができれば、地理的・空間的視点からのアプローチも有効になる。生活文化の地理的・空間的な理解が、単なる文化の比較で終わることなく、それぞれの国、それぞれの民族の生活文化のなかに、それを築いてきた普通の人たち、一般庶民の生活の知恵、価値観が存在していることに気づくことができる。それぞれの生活文化は、それぞれの国民、民族一人ひとりが、私たちと同じように、泣いたり笑ったりしながら試行錯誤を繰り返して、受け継いできた文化だと気づくことができる。どこの国、民族にも、それぞれの生活があり、生活を大切にする気持ちがあり、よりよくしてきた歴史があり、それが現在の生活文化につながっており、その生活を想う気持ちはどの国、どの民族にも共通のものであるということ、それを知ることが、異文化を理解するうえでもっとも重要な要素であると筆者は主張した。このような自文化の理解こそが異文化の理解を可能にするのであり、先人が見てきた夢をもっとよりよいかたちで実現させようという愛国心が、世界の人々と共に生きることとの両立を可能にするのである。

以上の立場から、自国の生活文化の理解は国際理解教育の基礎となることを明らかにし、このような教育を実践する家庭科教育は、国際理解教育において、さらには教育全体において、大きな教育価値を持つことを述べ、結論とした。